

## 団体活動とパーセンテージ

(社)日本硝子製品工業会常務理事 小川 晋永



今年に入って、最も世間をにぎわしたことの一つに消費税問題がある。まさに、カラスの鳴かぬ日はあっても消費税に関する記事がない日はなかったといえるだろう。

もともと、シャープ報告に基づいて昭和25年に制定されて以来大きな改革のなされていない税制だけに、大さわざになったのは当然なのかも知れない。しかし、実際に売手側に立って考えてみると、消費税の転嫁が本当にできるかどうか、また転嫁した場合、売上が落ちるのではないか、そして同業他社の動向は、などなど数え上げたらきりがなほどの不安材料を抱え込んでいるというのが現実の姿であろう。

ところで、消費税3%がどうして決まったか、何故3%でなければならないかというパーセンテージ議論が組上にのらないことが不思議に思われる。決まったことには当然しかるべき根拠があるだろうと信じているためであろうか。一方、新聞情報の一つに今回の税率は1%でも収支バランスがとれるという説がある。しかし、1%では低すぎて徴収しにく

い、5%では前回廃案になった売上税5%とイメージがグブッてしまう、この中間の3%なら国民を納得させやすいのではないかという見方である。いずれにせよ、真実は一般庶民にはなかなか分かりにくいところである。

もう一つ不思議なことに、何故か税率は奇数%が組上にのりやすく、偶数がないことに気がつく、偶数の中間、まあまあこの程度ということでないことを信じたい。

ところで、業界団体の事務局という特異な環境の中に籍を置く者として、団体活動の展望について考えることが度々ある。

見聞する各種各様の団体活動の盛衰は、時の流れとともにその評価は変わってくるというものの、存在感のある業界団体には、どんな流れの中にあっても共通した光り輝くものを持ち合わせていることに気がつく。

その団体が光り輝いている理由は、

時を得る…時流という大きな流れとともに

誕生し、流れの中で体質を変えてゆくフ

レキシビリティを持っていること

人を得る…良きリーダーに恵まれること、そ

してトップをサポートし、かつ意識向上に努める戦士達に恵まれていることの二つの面を併せもっていることによるのではないだろうか。

存在感のある団体について角度を変えて考えてみたい。

団体が生き残る条件として、7%の協力が得られるか否かにかかっているという説がある(5%説もある)。

その根拠は定かでないが、「皆様の時間の中から7%だけ貸して下さい。そうすればこの団体は積極的な活動ができるのです。」といった話を耳にする。これを自分なりに咀嚼してみると、メンバーの中の7%に当たる戦士達が積極的に事業活動に携わることによって、良い企画が生まれ、事業内容が充実し、さらにこれに係わる方々の輪が広がり、結果とし

て団体に参加することによって多くのメリットを享受できるという図式が描けることになるのであろう。

ニューガラスフォーラムはどうであろうか。

2年前の今頃、関係者が集まっては100会員を目指して日夜努力を重ねていた。そして今日、産・官・学のバランスのとれた協力と熱意によって会員数は170と大幅に増加した。また、先端技術の一翼を担う研究開発団体・産業団体として見事に開花し、さらなる発展を目指している。

団体存亡のカギ7%をはるかに上回るパーセンテージによって支えられ、拡大を図りながら今後ますます発展することを切に望みたい。